



Title	ロシア哲学の畸人 エヌ・エフ・フェオロドフの復活の哲学：それ信仰は望む所を疑はず，まだ見ざる所を馮擲とするものなり(ヘブライ書十一ノ一)
Author(s)	高橋，輝正
Citation	大阪外国語大学学報. 1958, 6, p. 90-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80137
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ロシア哲学の畸人

エヌ・エフ・フェオロドフの復活の哲学

—それ信仰は望む所を疑はず、まだ見ざる所を^{まこと}馮^{まこと}扱とするものなり—

(ヘブライ書十一ノ一)

高 橋 輝 正

О “Философия общего дела” Н. Ф. Федорова.

T. Такахаси.

Николай Федорович Федоров, автор “Философия общего дела” родился 1825 г. в России, и скончался в 1903 г. Он, очень гениальный, но совсем неизвестный всем философ, в дореволюционной России, первым поставил вопрос “Почему человек умирает?”

Он категорически заявляет, что смерть должна быть преодолена жизнью. Он подчеркнул, что сознание человека и воля освободят человечество от бессознательной стихий. Когда его труды вышли из печати, большинство, не понимая в чём дело, не обратило никакого внимания и даже считало их невероятной фантазией.

Но он неоднократно подчеркивает, что история человечества еще никогда не знала и не имела общего дела для уничтожения смерти, а до сих пор оно занималось только делом убийства.

Он пишет в своей книге, что наша жизнь есть долг отцов, и мы должны уплатить долг воскресением покойных, возвращая жизнь им.

По его мнению наша природа, сотворенная Богом, является принципиально наилучшей, полной, но еще не совершенной реально. Иначе говоря, она должна совершиться через человеческий труд. Воля Божества — все для человека, и через человека. Из этого следует, что дать целесообразность природе умеет только человек. Последняя цель человека — достигнуть бессмертия и воскресить всех отцов.

История бессознательной природы постепенно осознает свою истинную цель по мере того, что человечество успеет покорить смерть. Когда смерть совсем

исчезнет со сферы земли, тогда старому миру наступит конец и новая эра начнется.

Он утверждает, что истинный мир может быть обеспечен только войной, т. е. общим делом против смерти.

Мир нам нужен, но он сам собой не последняя цель, он нужен нам только для дела воскресения и прео доления смерти.

Я уверен, что его “Фирософия общего дела” будет играть большую роль в ближайшем будущем.

(一)

神話は人類の超意識にあって、無意識的に現象面に作用する前歴史的、前時間的事件の記述であるとすれば、旧約聖書創世記に述べられている天地創造と、エデムの樂園に於る原罪論こそは、キリスト教文化の影響下にあるヨーロッパ民族の思想を規制している根源的なものである。

凡そあらゆる宗教的思想は、人間性とその根底に於て神性と一致している信仰を基礎としている。人間は神の子であるが、この自然界に罪を得て、神の子たることを忘れて放浪している窮子であり、臆て再び神の栄光の座に上げられるという根本信仰が、色々なニューアンスをもって、異った教条、儀式となるのである。

又神を否定する無神論と雖も、人類は社会生活の究極に於ては、「必然の国から自由の国への飛躍」を夢に画いているのである。進歩と完成を同一視している間違いはあっても、その理念に於ては、人間性の中なる神性に対する無意識的信仰が秘められているのである。

さて旧約聖書創世記の神話の第一の部分は、一切は神の理念の現象であり、人間は神的相似であり、不死の生命的存在であることを宣言している。しかるに第二の部分は、「汝は汝がそこより取出されたる土に皈らむその時まで、面に汗して食物を食はむ」(創世記第三章 17—19節)とあり、人間をふくめての一切の根源は土、即ち物質である。この人間を含めて一切の生命の起源論に関する二つの対立する神話は、原罪を契機として現代人類の思想を二分して、本来一体たるべき人類を二つの陣営に引裂いている。

キリストは、神話の第一の部分る採って、第二の部分を断乎否定し、高らかに人間の神性を宣揚した。そして現象的自然の超克を説き、人間生命に対立する死的自然の変貌と復活を、身を以て立証した。生死流転の現象的自然は假象であって、神の創造にかゝる本体的自然は、人間を中心とする永生不死のコスモスであることを示した。しかるに神話の第二の部分を固執するユダヤ教徒のために十字架につけられた。現代に於ては、人間は神の子でなく、土から生じたものであり、生命は所詮物質的なものであるという弁証法的唯物論は自然の死的機構より、生命をつくり出す

実験によって、この第二の神話の正当性を立証しようとしている。しかしこれは生命を生み出したものは神ではない、生命は物質一土から生れるという唯物論的物活論と等しく、所詮「母なる大地」という神話的思惟への復帰となる。

さて現代世界人類の思想に於て執権的役割を果たしているものは、経済主義である。生命とは先づ経済過程であり、世界は経済の対象であり、人類の努力はすべて経済的意味としての富の獲得に捧ぐべきであり、この目的達成のために一切の文化を動員すべしと論じられている。曾て富を軽蔑し、人間の物欲を下等なものとした禁欲主義と対比すれば、誠に対蹠的であると謂わねばならぬ。このような思潮の根底をなすものは、人間生命の尊重と「生存欲」の肯定である。経済とはこの「生存欲」を充足する行為であり、人類文化は「生存欲」によって推進される。これが現代人の頭脳を支配している思想である。即ち生産手段と生産関係の適応関係の弁証法的発展の調節が政治であり、一切の文化はこの基礎に建築された上部構造であると。

しからば、一体何故に生存欲があるのか？ 位故に生存欲を満足させねばならぬか？ 経済はこの生存欲充実のための人間の戦いである以上、人生の最根本的なものであることは、自明のことである。各人は生れ出た以上、不可避免的にこの戦闘に参加せねばならない。しかし何故この生命戦争を行うか。その目的如何という疑問は、経済学の範囲外にあり、それは哲学一宗教の分野においてのみ、解決される。唯物論的自然主義は、これに対して解答を与える能力がない。「能力に応じて働き、欲望に応じて受取る」ことは、生存欲の根本的解決とはならない。何故なら生存欲が何故あるかという問題は、存在の問題でなく、「人間は何故死ぬか？」即ち生命的者が何故死ぬのか、生命とは死の現象なのか、何故人間は本能的に死を恐れるのか？という問題であるからである。この問題の解決こそは、現代の執権的思想である経済主義を基礎づける前提であり、又それを可能ならしめるものである。

土から生じた生命なるが故に、又土に皈らねばならぬ。人間とは所詮四大の俘囚である王であり、自然の飢と貧と死の脅威の下にさらされている奴隷であるという深刻極まる厭世観的気分が、宇宙的敗戦主義の雰囲気^が、経済的唯物論には漂っている。エホバの神の呪咀「土は汝の為に呪はれたり」は、経済的唯物論の奥深く、今尚生きているようである。

(二)

さて経済を可能にする「生存欲」をもつ人間は何故死ぬか？を問題にし、しかも経済を直接この問題をとく手段としたロシア哲学者が存在している。その人はニコライ・フェドロウイッチ・フェオドロフ（1828年—1903年）である。彼はキリストの復活に定位し、人間による一切の経済行為は、仮死的自然的、盲目的無意識的自然を人間の生命によって温め、その仮死より覚醒させ、こ

の地上に新天新地の永生不死の神国を顕現する目的をもっていると規定している。生命は父なる神よりの負債であり、人間はこれを死的自然を復活させることによって支払わねばならない。自然は人間の屍体であり、そこより食を得ているのは一種の食人行為である。全人類はこの自然超克、生命の復活のために一致団結し、死の克服を目的とせよと論じている。人類の歴史は、地上の全人類が同一目的のために団結し、一切をこの目的達成の手段として労働した経験をもっていない。人類はアベルとカインの如く、兄弟相殺し合ひ、動物的生存競争の法則は、人類社会を支配し、地上はために血潮が乾く間もないのである。

彼は社会主義を評して次の如く述べている。「現代では社会主義は支配的である。超越的内容のみをもち非現実的な、我々の内部にのみ天国をもっている宗教は、社会主義に敵対することは出来ぬ。社会主義はキリスト教的道徳の実現とさえ見られ得る……しかし社会主義は唯外部的利益のみで結合している他人同志の協同を親縁、親和と偽称しているが、真の血肉的親縁は、内的感情で結ばれており、親和の感情は、人格の表象に満足せず、之を直視することを要求する。死は直視を表象にかえてしまう……「人類の事業」を生産物の公平な分配の保有のみに限定し、誰からも多く取得せぬように、又自分のものを拒んで、他人に譲ってやるようなことのないように、冷酷無情に各人を監視下におくことは、果して可能であり、又自然であらうか」更に又海洋文明と内陸文明について論じ、海洋国家が世界文明を支配する間は、人類の統一は不可能であり、内陸国家が世界文明を左右するに至るとはじめて世界は統一的となる可能性が生じてくると、大陸国家の発展が、新しい歴史の到来を約束すると論じている。

彼は祖国ロシアが正に祖先復活の大事業を担う使命があることを直観し、ロシア民族こそ新天新地の地上天国を現前する終末論的運命の担手であると主張している。

彼は宗教は祖先崇拜であり、墓場は人の子らがその父に対して、自己の生命の負債を確認し、又父が自然の死的力の俘囚となっていることに対して、悔嘆し、父祖に生命奪を還することによって、自己の生命の負債を償還することを誓約する場所であると説き、墓場すらも持たぬ都市文明は、父を忘れ、唯生けるもののみの悦楽にうつゝを抜かしている親不孝の文明であると痛烈に非難している。

都市文明は、自然の災厄に無関心である。死をもたらす暗黒力を認識しない。死的力として人間に対する自然を意識しない。人間の生存本能こそは、この自然超克の悲願である。経済とはこの自然を労働を通じて、意識化し、覚醒し、霊化する行為である。死的機構の中なる生命の火、かそけく燃えている不滅の火を取出して、これを遍照することが経済である。経済とは生命と死の二つの原理の闘争の表現である。死とは罪の結果であり、生命の疾病である。死は本来非存在

である。光のあるところ闇は消える。経済の炬火をかゝげて、自然の死的機構の闇を照らしつゝす時、自然の中に埋没している死者は復活して、初めて永生不死の天国が到来する。死者の前に生者は供物を捧げる疑制を行っているが、真に死者に食を与えんと欲するなら、死者を復活さすべきである。

そもそも理念は肉化せねばならぬ。食事は人間による自然霊化のための聖秘礼である。実在化しない観念は、無意味である。神の子キリストは人間の肉体となって、世界を通過した。神人の肉体（パン）と血（葡萄酒）を食うことによって人間肉体の霊化が保障される。神の意志は「人間を通じて、人間のために」顕現する。自然自体に合目的性はない。自然は無意識である。自然に合目的性を与えるものは人間以外にない。これ神の最高の合目的性である。

この永生と復活を経済の目的としたフエオドロフの独特の哲学は、其後セルゲイ・ニコライウイツチ・ブルガコフに継承され、その経済哲学となって体系づけられ、更にボリス・ペトロウイツチ・ヴィシエスラフツェフによって倫理的に体系づけられた。後の二者はいずれもエミグラントとして巴里に流離していた哲学者であるが、スラブ民族特有の宗教的雰囲気をもて、唯物論的な思想を基礎づけたロシア的哲学者である。

フエオドロフの哲学は、ロシア本国に於ては、経済的唯物論の沙漠の中を流れる河のように、遂に地下に潜って、その流れは消えてしまっているようであるが、恐らく何かの原因で地殻に大変動が生じた時、その断層のきれ目から、丁度オアシスにふき出る泉のように、再びロシア本土に、溢れ出て、緑の山野を潤して、人々に生命の水をくませることであらうと信じている。

（三）

神の存在を否定し、神の代りに「物質」をおきかえている所謂「弁証法的唯物論」では、既に精神と物質といった一般概念では、誤解が生じ得る程、物質の範囲がひろまっている。物質とは何かという説明に対して、ソ連の哲学は、次のように説明している。

「世界は本性上物質的である。万物は物質によって構成され、物質によって生み出されたものである。原子、生ける細胞、有機体、人間の思惟—これは物質の多様な姿である。物質は永遠にして無限、不生不滅である。物質は単に形態をかえるだけである」（ソヴェト哲学小辞典参照）

又最近では、次のように要約して、物体と物質の相違を明かにしている。即ち物質とは「意識の外に、意識とは独立に存在し、意識に反映する客観的實在」であると規定している（ティ・イ・オイゼルマン「唯物論とは何か」）。このような哲学的物質は、時間空間の中に存在する一切を包含し、それはもっと解り易い言葉でいえば、不生不滅の生命、エネルギーに他ならない。世界はこの生命エネルギーの心的並に物的運動状態であり、それ以上でもそれ以下でもないということは、

仏教哲学を髣髴させるものがある。一切の物心現象一色は、生命エネルギー（物質）一空一の運動である。空則是色、色則是空。本体は不生不滅不増不減である。水と波の関係である。一切は因縁生にして畢竟空である。物質の弁証法的発展である。「生死は仏の命」という道元禅師の提唱を唯物論が翻訳すると一切の現象は、物質運動ということになるかもしれぬ。しかし、唯物論にかけているものは、物質運動の奥にある叡知と慈悲の光を認識する能力である。

とまれ、いづれにせよ、最早やこのような物質主義によれば、そこに働らく法則は単なる力ではなく、生命力の叡智というほかはない。それが人間の知識として開顕するのである。弁証法的唯物論の物質は、無限に深い叡智を蔵して、宇宙に君臨する神の代名詞にはかならぬのである。それはこれを信ずる人にとっては、明かな他在であり、しかも明白にその神的意志を宇宙秩序の中に感じるからである。果して弁証法的唯物論者は、かゝる神的意志の實在を承認するであらうか？ 彼等に於ては、しかし既に神の座は人間の道義に無関心な「物質」が占め、その「物質」は弁証法的自己運動によって進化して行く。その進化の推進力となっているのが「生存欲」であり、その理想的状態は「物質的幸福」である。世界を支配するものは、「物質」の自己発展の弁証法的法則であり、これを忠実に守る時、幸福は訪れる。この「物質」の発展法則は至上命令である。正しく信仰者の神の律法である。この律法に背くものは、神に裁かれる。律法こそ一切の審判者であり、人類はこの律法より一步も出ることはない。

弁証法的唯物論は、「物質」によって与えられる法則を絶対視する。「資本主義の棺を担うものは社会主義である」という史的唯物論は、律法主義の信仰である。

律法によって人は裁かれる。資本主義は悪とされ、社会主義は善とされる。旧るきものは悪となって滅び、新しきものは善となって栄える。物質の自己発展の法則は、新陳交替であり、進化論的であり、革命的である。史的唯物論者は宗教裁判官の役割を演じる。誠にこの法則にそむくものはすべて災ひなるかな。

しかるにキリストは神は愛なりと、その福音を伝え、律法主義の上に愛をおいた。彼は人間は律法に服従する奴隷でなく、自ら律法の上であってこれを駆使する自由者であることを教えた。人間は物質一自然でなく、自然を超克する存在であると宣言した。自由は認識された必然ではない。自由は愛である。愛は生命である。彼は人間の自然超克を二つの教えで要約した。即ち「汝心をつくし、精神をつくして意をつくし主なる汝の神を愛すべし」そして「己の如く汝の隣人を愛せよ」すべて律法はこの二つの誠によっているのであると。キリストは自然と人間を倏列した。人間は土から生じたものではない。神の子であると宣言した。歴史は繰返えす。曾てゴルゴタの丘で十字架にかけられたキリストは、現代人によってその弁証法的唯物論の十字架にかけら

れている。

現代程、「平和」が叫ばれている時はない。しかも現代程、「愛」の言葉を耳にせぬ時代もないのである。現代人は「闘争」という文字をやたらに使用している。丁度それを口にせねば生きていくことが出来ぬかのようである。しかしこの闘争のいやはてが「原水爆による全人類の自殺行為」といったことになり、しかもそれが「物質」の自己発展の必然的法則であると科学的に規定されたら、律法主義者は何というであらうか？ 平和は愛なくしては不可能である。愛は、自然の意識化、死の克服の事業である。それは復活の信仰である。この信仰の下にのみ、原水爆の死的力が、生命的となるのである。自然の自己発展は決して、平和を約束するものではない。自然の生長は、無記であり盲目的であり、必然的に死を約束する。

「経済的生産力の発展」が人類の幸福を約束するという信仰は、今では人類自殺の危機を招きよせているといわねばならぬ。キリストは荒野に於る悪魔の試練に会って、「汝もし神の子ならこの石をパンにかえよ」と経済至上主義の誘惑にあった。石をパンにせよ。地上の飢餓はその日のうちに消滅し、人間悪はなくなり、天国は到来する。これが悪魔の誘惑であった。これに対してキリストは断乎として人間生命の真理を喝破した。即ち「人はパンのみにて生きるに非らず」と。現代人の多くは「人はパンのみによりて生きるなり」と信じている。そして石がパンになる日を待望している。

かゝる危機に、フエオドロフの復活の哲学を想起するのは、無意味ではあるまい。

(完)